

和田幸一郎 先生（気象予報士・気象キャスター・元秋田地方気象台長）略歴

- 1957年 山形県東置賜郡高島町生まれ
- 1976年 山形県立高島高等学校卒業後、陸上自衛隊第6師団入隊、10月国鉄に入社し山形車掌区に配属
- 1978年 同僚と結成したバンド「POPcorn プラス ONE」でヤマハポピュラーコンテスト東北グランプリ大会に出場
- 1987年 国鉄分割民営化を機に気象庁入庁、秋田地方気象台に配属
- 1997年 山形地方気象台予報官
- 2001年 気象の調査研究等による防災機関への啓蒙活動が評価され、仙台管区気象台長表彰を受ける
- 2007年 緊急地震速報広報ソング作曲
- 2008年 酒田測候所長
- 2011年 福島地方気象台時代、東日本大震災に遭遇
- 2012年 仙台管区気象台総務危機管理調査官
- 2014年 仙台管区気象台気象防災部気象防災情報調整官
- 2016年 盛岡地方気象台長 岩手を襲った台風10号で犠牲者が出て、首長とのホットラインの必要性を痛感する
- 2017年 秋田地方気象台長 平時から気象台と自治体トップや防災担当者と「顔の見える関係」を築く
- 2018年 定年退職後、防災気象官として再任用 6月ホットラインを通じた功績などが評価され、秋田地方気象台職員一同名で国土交通大臣表彰を受ける
- 2019年 9月30日～現在 秋田朝日放送気象キャスターとして活躍中



アマビエ



「夢を彼の娘に」

作詩・作曲・歌・演奏：和田幸一郎

現代の肖像「ホットラインで命を救う」（朝日新聞 WEEKLY AERA '19.3.18 No.11 より抜粋）

和田が多忙な中でこうした依頼を引き受けるのは、多くの人に防災・減災意識を高めてもらいたい一心からだ。災害に避難勧告や指示が出ても家に留まり、命を落とす事例が後を絶たない。朝日新聞が昨年、特別警報を発表した自治体を対象にアンケートをしたところ、実際に避難所へ逃げた割合はわずか2.6%。18年7月の西日本豪雨でもホットラインは使われたが、それでも逃げ遅れるなどした住民225人の命が失われた。内閣府の中央防災会議がまとめた避難対策の報告書には「行政主導の対策には限界がある。『自らの命は自らが守る』ことが必要」とする異例の提言が載り、住民側の意識改革を訴えた。

気象台の現場でそれを痛感する和田だからこそ、講演では大雨や落雷などから身を守るために必要な知識や避難を決断する勇気を訴える。

和田にいまの心境を尋ねると「まだ、やり切った感じはしない」。気象災害で失われる命が一人でも減るよう、しばらくは啓発活動を続ける覚悟だ。



清水 薫 先生（緑町グループホーム・緑町デイサービスセンター管理者）略歴

東北女子短期大学保育科卒業後、障がい者の授産施設や、保育所等勤務経験し平成9年4月より社会福祉協議会に入社。

訪問介護、デイサービスセンター、グループホーム等の経験し現在に至る。

保育、幼稚園教諭、社会福祉主事、介護福祉士、介護支援専門員他



*今回講演『介護サービスの基本知識と現場での想い』について

皆さん、多かれ少なかれ介護との接点があり、遅かれ早かれだれでも介護を担ったり、介護されるお立場になります。これから介護をする人も、介護を受ける人も地域の中で安心、安全に暮らせるためにどうしたらいいか一緒に考えていきましょう。

介護の基本知識を改めてお示しし、今迄に各所の現場で体験したことをお話しし、ご参考にしていただければと思います。質問も歓迎ですので、よろしくお祈りします。